

質の高い建築物を求めて

鈴木博之

1. 建築史・建築文化から考える「質の高い」建物とは

造形芸術としての質の高さ、チャレンジングな性格など、建築物評価の基準は多岐にわたるであろうが、ここでのコンテキストに照らしたときに重要性を持つのは、「長期にわたって機能を全うし、存在価値を維持し続けられる」デザインや計画がなされているかである。

このような「長寿命」を実現しうる建築物がその意味では建築史的に質が高いといえよう。地球環境にとってもサステナビリティの観点からも「長寿命」を実現することが重要であろう。

無論、あたらしい造形の可能性を拡張する建築が生まれることは重要であり、その試みのなかでは、短命に終わる建築が生まれることもあるであろう。「質」は多様性をもつものであり、すべてをチェックリスト化したり数値化・指標化したりして「客観化」しないことが大切である。建築物の「質」を一元的にとらえないということは、一方で重要なことである。

2. 現在の日本の建築物の質はどうか

現状での日本建築は圧倒的に短命である。かつての100尺の高さ制限時代に、それを8階で設計した丸ビル、5階で設計した中央郵便局は、例外的存在であり、戦後は9階、10階で設計することが一般的であった。これは短命なビルを生む素地の一つであったといえよう。

日本の建築に対するメンタリティを取り上げて、木造建築の「仮の住まい」「焼け屋造り」などの考え方が根底にある、などと考えるのは、何も生まないであろう。

建築物を「長寿命化」を軸にして作り上げてこなかったことが、きわめて貧弱な建築ストックを作り出してきたと思われる。ライフサイクルコストの設計、ストックマネジメントとしての建築行政を展開する必要があるだろう。

3. 日本と海外の建築物の違い

たとえば英国におけるプランニング・パーミッションという制度と、日本における用途・容積率の設定に基づく建築確認申請制度の違いが、都市的観点からの質の違いを生んでいるのではないかと思われる。「目一杯容積を獲得する、その容積をできるだけ少ないイニシアル・コストで実現する」という経済第一主義的発想が、質の低い建築物を生む。

個別事例を現状の容積、形状をベースに考えてゆく思想を参考にすべきであろう。

建築物の「質」を本当に重視するのであれば、経済発展優先の容積率設定の思想を見直す必要が生じるであろう。

4. 建築物の質の向上に対して関係者が果たすべき役割

教育の段階での、質の向上関連の重要性の教育が求められる。ウィトルウィウスのいう、Firmitas の概念を日本は理解しないう。この言葉を「強度」と考え「耐久性」という概念を持てなかつた。建築構造学が、強度計算、耐震設計中心に組み立てられてきたことの弊害は大きいのではないか。

「長寿命建築」を軸とした設計思想、個別技術の構築、「長寿命建築」の存在を前提とし、それを可能にする法制度、経済制度の構築も必要であろう。

建設行為は、経済開発行為であるだけでなく、環境への影響を及ぼす行為であり、文化的行為でもあるということを広く理解させる必要がある。今まで、建築物は建設行為としてとらえられ過ぎてきた。

5. 「質」を確保する整備促進・普及のための方策

繰り返すが、「長寿命建築」を軸とした設計思想、個別技術の構築、「長寿命建築」の存在を前提とし、それを可能にする法制度、経済制度の構築も必要である。

とりわけ、構造強度の判定、補強法などの再構築は重要であろう。

6. 価値ある建築物やその記録の保全についての国の役割

従来の保存行政と建設行政の融合をさらに進めることが必要であろう。その際、保存行政が主体となって建設行政がそれを支える姿勢が望ましい。また、個々の質の高い建築物の保存を、都市計画的広がりの中で位置づけられる法制度が望まれる。この建築物の質の高さと、良好な都市環境とが、密接に結びつくことが望まれる。

こうした姿勢が整って初めて、数値化できない芸術的価値、造形的価値が理解されるようになるであろう。一元的に一律の制度によって機械的に守ることができないのが、建築の「質」だという逆説を銘記しておきたい。

● — 建築の歴史 —
建築の歴史

鈴木博之

「建築学」の教科書（彰国社）

安藤忠雄・石山修武・木下直之・佐々木睦朗・
水津牧子・鈴木博之・妹島和世・田辺新一・
内藤廣・西澤英和・藤森照信・松村秀一・松山巖・
山岸常人 著

90・110ページより抜粋

建築はしふといものなのかが、ここで与えられたテーマである。

「建築はしふといか」。

これに対してはさまざまな答えが用意されるだろう。

建築は古代から伝えられてきたから、長く残るものの代表格といえる。したがって、建築はしふといという考え方がひとつである。

けれども建築は思うほどには長もちしない。すぐに取り壊される。日本では一世紀以上立ちつづけている建築は、思う以上に少ない。とくに一般のオフィスビルや住宅は五〇年もたずに取り壊されるものが大半である。東京の場合、江戸時代以前の町家は、大都市から消滅したといつてよいし、地方の都市からも急激にその姿を消しつつある。

しかし身のまわりの建築物だけを思い浮かべていても、語は感性的領域を超えない。

そこで、建築の理論的古典といわれている古代ローマの建築書にあたってみよう。それはカイトルウィウスが著した『建築論』一〇巻である。現在まで伝わる、もっとも古い西欧の建築書であり、その影響力はいまでも決して消滅してはない。

ローマ皇帝アウグストゥスの治世下に成立したといわれるこの書物には、建築の目標が簡潔に箇条書きされている。彼はそれを「強さ (firmitas) ・用 (utilitas) ・美 (venustas)」(森田慶一訳)と唱えた(第一巻、第三章、第二節)。これは時代を超えた建築の理想とすべき要素であるとして、現代の建築家もしばしば引用する。たしかにもっとも妥当な三要素といつ

べきであろうと思われる。ただし、この三要素は重要な順に記されているわけではない。これひとつとして欠けてはならぬ要素として、これらは掲げられているのである。

一般に「用」とは建築における機能を指し、「強さ」は建物の強さ、すなわち構造的強度を指し、「美」とは意匠的表現の美しさを指すと考えられている。であればこそ、この三要素は建築の根幹に横たわるものと考えられてきたのである。

このうちの「強さ (firmitas)」という概念をこれから考えてみたい。

なぜならこの概念には、建築のしふとさが関係しているように思われるからだ。詳しいことは論文にして世に問うべきであろうが、ここではこの問題に気づいてからの、思考の経路をそのままにたどってみたい。なぜなら、この「強さ」という概念が、建築にとっては構造的強度が重要であるという観念を、とりわけ日本で強固に生み出したように思うからだ。

日本は世界有数の地震国である。したがって「建築は地震の衝撃に耐えられなければならない」という命題が、日本の建築界には天命のごとくに覆いかぶさっていた。明治になって西欧の建築技術を本格的に導入しはじめた人々の脳裏に焼き付いていたのは、「安政の地震」といわれるものだった。じつは安政の地震というのはひとつではなく、安政年間には日本各地で一九回にも及ぶ地震が発生していたのだという。そのなかで「安政の大地震」というのは安政二(一八五五)年一〇月二日におきた、江戸の龜有付近が震源だったといわれる直下型の地震で、江戸城はじめ各所に被害が出た。けれどもその直前の伊豆を震源とする地震も、ちやうど下田

しふとい

に来て開国の交渉をしていたロシアのプチャーチン一行の艦を襲い、彼らは下田を出て戸田で新しく西洋船を建造しなければならなくなっているほどの被害を受けていた。

明治の人にとっては安政の地震は恐怖の記憶であり、建築学者でもが国耐震構造の大家であった佐野利器も、関東大震災が東京を襲ったときに、とつとつこれは安政地震並みの大地震だと感じている。

明治年間で最大の地震は「濃尾地震」だった。明治二四（一八九一）年一〇月二八日に岐阜・愛知を中心におきたこの地震は、七〇〇人以上の死者を出し、家屋の倒壊も八万户を数えた。ちょうど丸の内にオアイス街を建設しはじめていた三菱の幹部連中はおおいに驚き、このような地震が東京を襲えばどうなるか、さっそく調査させた。このとき派遣されたのはお雇い外国人として工部大学校で教授した英国人ジヨサイア・コンドルだった。コンドルを派遣すべきだと進言したのは、以前から三菱と近かった英国人トマス・グラバーである。

コンドルは基本的に建物を重くがっちりつくるのが大事だと考えたらしい。彼が手がけていたのはシンガポールの建築である。それに対して、彼と同じお雇い外国人で、勤務していたのも同じ工部大学校であった鉱山技師のシモン・ミルンは、少し違った見方をしたらしい。明治一三（一八八〇）年に日本地震学会の設立にあたって、その世話役を務めたミルンは以前から地震の研究を行っていた。のちに地震学者として名を残すことになるミルンは、地震は振動であり、波であるから、それに耐えるためにはただ重くすればよいというものではないと考えた

らしい。現に木造の建築でも地震に耐えたものがある。

こうして建築を地震から守るための工夫は、いくつかの考え方を生み出してゆくことになる。それが少なくとも建築の世界でひとつになるのが、関東大震災以後である。

まず濃尾地震の教訓を受けてその翌年、震災予防調査会が発足し、地震に対する研究を行うようになる。明治二八（一八九五）年には、調査会報告のひとつとして『木造耐震家屋構造要項』が出版される。そしてその活動のなかから佐野利器による建築の耐震構造の考え方がまともになってくるのである。彼は大正五（一九一六）年に『家屋耐震構造論』を震災予防調査会報告のひとつとして刊行し、地震による力を震度という言葉に定義した。ここに現在に至る耐震建築の考え方が定まった。大正九（一九二〇）年に制定された日本の市街地建築物法には建築の強度計算の条項が含まれることになる。しかしそこから、日本の建築はまず耐震性能を考えるべきであり、かたちや色について云々することは婦女子の仕事だといった気風まで生まれる。実際、佐野利器はそうした価値観を書き記している。

関東大震災は大正二二（一九三三）年のことであるが、この年のはじめに、内藤多仲が「架
構建築耐震構造論」と題する論文を日本建築学会の『建築雑誌』に掲載していた。このなかには横力分布係数の考え方が定義されており、壁による耐震が重視されていた。それ以前、大正九（一九二〇）年に発足した、日本の前衛的建築のグループ「分離派建築会」のメンバーたちは、建築は芸術であることを認めてくださいと叫んでいた。それほどまでに、建築は構造的強

度を十分に考えることが先決であるとする風潮が強かったのである。ウィトルウィウスの言葉に従うなら、「強さ」の重要性の前に「美」はきわめて旗色が悪かったのである。

佐野利器や構造派の人々がウィトルウィウスに基づいて建築を考えていたかどうかは定かではないが、日本では事実として「強さ」の概念が支配的であった。

ここで「強さ」の概念を考えてみたいと思うのは、日本における建築観をかなりな程度支配している「構造的強度」重視の考え方は、果たしてウィトルウィウスに照らしたときにはどのようなことになるのかを知りたいからである。

先にも述べたとおり、ウィトルウィウスのいう「強さ」とはfirmitasという言葉である。これはしっかりした基盤に支えられた強さだといわれる。しかしながら、そうした意味での「強さ」には二つの側面があるのではない。

ひとつの「強さ」は、強度をもった構造の建築という意味である。これが日本で重視される建築の「強さ」であることはまちがいない。だが、「強さ」のもうひとつの側面は、「しっかりとしている」ということであり「長もちする」という意味での「強さ」である。どちらも同じではないかという人もいるかもしれないが、これは明らかに異なる。一方は「強度」であり、他方は「耐久性」であるからだ。

ここでウィトルウィウスの概念を、後世の人々がどのように解釈してきたかを見てみよう。

もうひとつのテキストは次のものである。

Haec autem ita fieri debent ut habeatur ratio firmitatis, utilitatis, venustatis.

まずはじめに、日本語訳のテキストを見よう。森田慶一訳の『ウィトルウィウス建築書』では次のように訳されている。

「これらは、また、強さと用と美の原理が保たれるようになされるべきである」(東海大学出版会、一九六九年、三二ページ)

彼は以前に同書を訳出したときにも、ほぼ同じ言いで回して訳していた。

「建築はまた強さ、用、美、の原則が保持されるやうに作らるべきである」(生涯社、一九四三年、二三ページ)

現代語訳のイタリア語版のウィトルウィウスではどのような言葉が用いられているのだろうか。友人のローマ大学クラウディオ・ボッサーリノ教授が一九九八年に出版したエッセイ¹⁾を見よう。

「Tutti quest edifici debbeno essere costruiti tenendò cont della ratio firmitatis, utilitatis, venustatis, cioe delle ragioni della stabilita, della utilita e della bellezza.」
(Marco Vitruvio Pollione, *De Architectura Libri X*, a cura di Franca Bossalino, Edizioni Kappa, 1998)

ウィトルウィウスの三要素は、はじめにイタリア語を引きながら訳されており、それは

「della stabilita, della utilita e della bellezza」となっている。della stabilitaが「強さ」である。della stabilitaは「しっかりした基盤の上に堅固に建てられる」という意味ととれているので、強度とも耐久性ともとれるのであるが、この言葉に近い英語は安定したという意味のstabilityであるので、どちらかといえば長もちする、耐久性があるというニュアンスが強いのではないが。

イタリア語訳のウイトルウイウス関係の文献では、「強さ」はstabilitaという語によって表される例が多いことがわかってきた。また soliditaという言葉に置き換えられる場合も多い。これは堅固さという意味に近い。この点は研究室の横手義洋氏に負った。彼はイタリア留学から帰ったところである。

次に英語に訳されたウイトルウイウスの『建築論』ではどのような言葉が用いられているかを見よう。現在でもあちこちよく使われる現代語訳のウイトルウイウスは、モリス・モーガンの訳である。これは一九一四年にハーヴァード大学出版局から刊行されたもので、いまなお教科書としてよく使われている。

「All these must be built with due reference to durability, convenience, and beauty.」
(Vitruvius, *The ten books on architecture*, Translated by Morris Hicky Morgan, Harvard University Press, 1914, reprinted Dover Publications, 1960.)

モーガンは先づいから、ウイトルウイウスによる建築の三要素を、それぞれ「durability,

convenience, and beauty」と訳している。durabilityという言葉は明らかに耐久性を意味する。モーガンは「強さ」の概念を構造的な強度というよりも、長もちする耐久性とはっきり解釈しているのである。

ドイツ語訳を見してみよう。アルヒムス社から出版されているアウグスト・ローテ訳では、三要素は「Festigkeit, Nutzbarkeit und Schonheit」となっている (Vitruv, *Baukunst*, Übersetzung : August Rode, Artemis, 1987.)。Festigkeitは、固さ、堅固、安定などの意味をもつ。ちなみにfestという形容詞は、団体の、団形の、といった意味である。

フランス語訳はどうか。これはフランス語圏の建築が専門である研究室出身の中島智章氏に尋ねた。彼はベルギー留学から帰ったところである。われわれの研究室には多くの国からの留学生で、多くの国に出かけた大学院生がいるので、こうした提案にはきわめて便利である。

ど、どちらかたかといらば、クロード・ペローによる一六三三年のフランス語訳には「強さ」はSoliditeと訳されているとのことだ。これはフランス語圏のペーラールによるフランス語訳の現代のフランス語訳でも踏襲されているという (PERRAULT, Claude: *LES DIX LIVRES D'ARCHITECTURE DE VITRUVÉ, CORRIGÉZ ET TRADUITS*, nouvellement en François, avec des Notes et des Figures; Chez Jean Baptiste COIGNARD, Paris, 1673; Preface Antoine PICON, Bibliothèque de l'Image, 1995, pp.15. PHILANDRIER, Guillaume: *Les Annotations de Guillaume Philandrier sur le DE ARCHITECTURA de*

Vitruve, Livres I a IV, Collection DE ARCHITECTURA, introduction, traduction et commentaire par Frederique LEMERLE, Fac-simile de l'edition de 1552, Librairie de l'Architecture de la Ville, Picard editeur, Paris, 2000, p.80. (おとひ、ハムシ、ハムシ部分 Opp.16-17.)

Soliditeはやはり堅固といふ意味が強い。ドイツ語訳と似たおとひの解釈である。

こうなると東洋圏での解釈も見えておきなくなる。中国からの留学生劉斌氏に聞くと、中国語訳では、「強さ」は「堅固」と訳されているとのことであった(『建築十書』高麗泰訳、知識産権社、二〇〇一年)。この意味するところはFestigkeit, Soliditeに近いといえよう。ちなみにほかの二つの要素は「活用」と「美観」である。

次は韓国である。韓国からの客員研究員の皇甫偉氏に聞くと、ウイトルウイウスによる建築の三要素は、韓国語訳ではそれぞれ「構造」「技能」「美」と訳されているという(『建築十書』吳徳威訳、一九九一年)。なまじ漢字を同じくするので、字面の印象が誤解を与えやすいが、韓国語では「構造」という言葉は堅固さを表すと考えてよいのだそうである。「技能」も「用」に近い意味であるという。

残念ながらこれ以外のアジア諸国では、ウイトルウイウスの自国語への翻訳はないらしい。ここまで来ると、さらにはほかの言語圏での解釈が知りたくなる。研究室には英、仏、伊、独、中、韓のほか、ポルトガル語圏(ブラジルからの留学生)、スペイン語圏(アルゼンチンから

の留学生、スペインで仕事をしたベルギーからの留学生、トルコからの留学生、エジプトからの留学生もいるので、先が楽しみである。

しかしここでは、もう少し結論に向けて話を進めてみよう。

ウイトルウイウスを意識したルネサンス期の建築家たちの建築論の著述のなかに見い出される、ウイトルウイウス解釈を検証することによって、彼の述べた建築の三要素がどう理解され、根づいていったかを見てゆきたい。

レオン・バッティスタ・アルベルティの『建築論』には、ウイトルウイウスをふまえた記述が数多く現れる。ここでは相川浩訳『建築論』(中央公論美術出版、一九八二年)によって、検証してゆこう。

「(前略) われわれは軽視できない三つのものに気付く。それは強さ、堅、その他にはほとんど該当するものである。すなわち、特定の意図された用途に対して妥当であり、なかにすくまわめて健康的であること。堅固と耐久性については、察算せず堅くまた十分に永続性を持つこと。快と優美については、好ましく構成され、いわばそのあらゆる部分が飾りつけられていること」(二一ページ)

ここでは、「用途」「堅固と耐久性」「快と優美」という要素が、ウイトルウイウスの「用(utilitas)」「強さ(firmitas)」「美(venustas)」に対応していることが知られる。

また、次の記述にも出会う。

「一般に建築することに関連する分野、すなわち用途に合わせ、耐久性のためにきわめて堅固に、優美と華麗のために、できるだけ整備してわれわれは建設してきた」(二五八ページ)

ここで、ウイトルウイウスとの対応は明瞭であろう。

さて、次の場合はどうであろうか。

「今は用や強より建築の美と裝飾を主として満たすものを、あらかじめ区分しよう」(二八六ページ)

ここでは「用」「強」「美」という言葉が用いられており、より直接的にウイトルウイウスへの言及が感じられる。しかしここでの訳語は、森田慶一訳のウイトルウイウスをふまえたものであるにちがいない点を、忘れてはならないだろう。「強」はアルベルティのほかの箇所における用法と同じ概念用語なのである。

これらの記述のなかから見えてくるのは、「耐久性のためにきわめて堅固に」という言葉に現れる「堅固」とは、「耐久性」にかかわる概念と受け止められていたらしいという事実である。このような概念の形成をはつきりと示すのが、アントニア・パラディオによる『建築四書』である。彼はこの著作の冒頭で、次のように述べる。

「いかなる建物においても、(ウイトルウイウスがいつているように)、三つの事柄が配慮されるべきであり、それらなくしては、どんな建物も称賛に値するものとはならない。そして、こ

れら三つの事柄とは、有用さ、あるいは便利さ、耐久力、そして美しさである」(桐敷真次郎訳『パラディオ「建築四書」注解』中央公論美術出版、一九八六年、三五ページ)

ここでの三つの要素、「有用さ、あるいは便利さ」「耐久力」「美しさ」が、ウイトルウイウスの「用 (utilitas)」「強さ (firmitas)」「美 (venustas)」に対応している。ここでパラディオのいう「耐久力」とは、la perpetuitaである。これは永続性という意味が強い言葉である。英語で類縁関係が強い単語に、perpetuityという言葉がある。「永続性」がその意味である。この言葉はじつはコンドルが使っている。彼は明治二七(一八九四)年に東京、芝に唯一館という和洋折衷の建築を設計しているのであるが、こうした折衷の試みを説明するかのようにな、こう語っているのだ。

「(前略) 元来他国の建築家にして、日本の如く一の国民的様式の連続せる概念の浸潤し居る国に来れるものは、(中略) 一般に先づ、如何にしてこの国民的様式を永続せしめ得るやなる問題に就て腐心するものなり」(『建築雑誌』四〇二号、二七八ページ)

ここから「国民的様式を永続せしめ」という文章の「永続せしめる」は、同誌に掲載されているコンドルの原文では、perpetuateなのである。コンドルがパラディオにこうなり、さらにはウイトルウイウスの三要素にまでさかのぼる概念として、perpetuateという言葉を選んだとは思えないが、彼が望んだ「国民的様式を永続せしめ」る仕事は、ウイトルウイウスが望んだ建築の「強さ」に導くことであつたのである。

ウィトルウィウス自身、『建築十書』のなかで、あとから次のように自分の言葉を用いた説明をしている。

「家の地面より上にある部分は、もしわれわれが前の巻で城壁や劇場について述べた通りにその基礎が造られているならば、それは疑いもなく長年に亘って堅固であるだろう。しかし、地下室やそのヴォールトが築かれる場合、その基礎は上部建物に造られる壁体よりも厚く造られねばならぬ。また、壁や角柱や円柱は、その堅固さに相応するように、下部構造の中心に鉛直に配置されるであろう。なぜなら、もし壁や柱の荷が重なりであるとするれば、持久的な強さをもちえないから」（森田慶一訳、第六書、第八章）（傍点は鈴木による）

ここに現れる最初の「堅固」はfirma、二回めの「堅固さ」はsolido、そして「持久的な強さ」はperpetuam firmitatemという言葉である。ここからうかがえることは、ウィトルウィウスによる「強さ (firmitas)」の概念は、長年にわたる持久的な強さという意味を込められていたのではないかと推測される。そうした事実のうえで、ルネサンスの建築書に見られるさまざまな解釈が生まれてきたと考えられるのである。

ウィトルウィウスが述べた、「これらは、また、強さと用と美の原理が保たれるようになされるべきである」という言葉は、しかしながら日本語になったときに、「強さ」という言葉の響きから、「構造的強度」というニエリスが強いものと受け止められがちであった。

森田慶一が最初にウィトルウィウスの日本語訳を出版したのは、先に見たとおり昭和一八（一九四三）年であった。この時期には、日本の建築構造学研究は、戦時における耐爆構造の研究にも及んでいた。森田慶一自身は、大正九（一九二〇）年に分離派建築会のメンバーとして、当時の構造中心の建築観に反旗をひるがえした前衛であった。そこから古典的建築理論の研究に進んだ彼にとって、「強さ」という訳語の選択がどのような心理的判断によるものかは、いまとなっては推測するしかない。だが、われわれが「強」の字から受ける印象は、即物的な構造強度である。

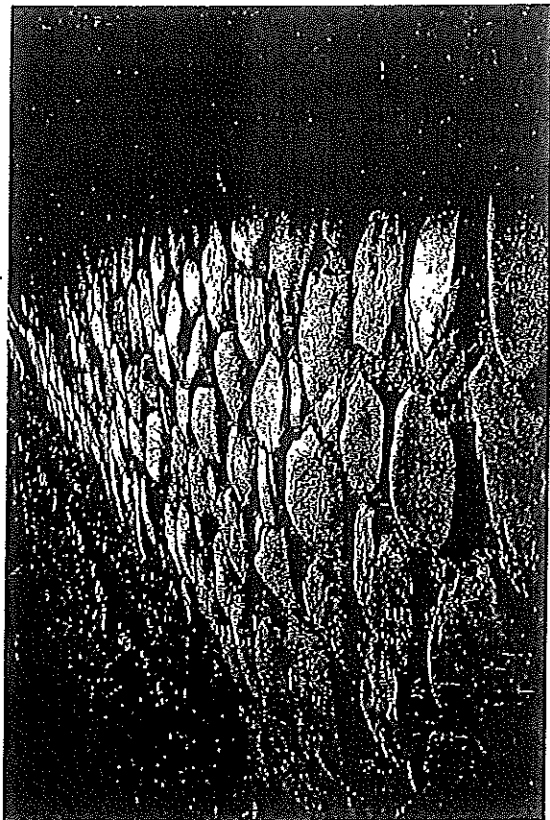
森田は自分の著作のなかでウィトルウィウスの理論をこう解説している。

「ウィトルウィウスは、まず建築に三つの立脚点ratioを認める。すなわち、『各種の建物は強さfirmitas、用utilitas、美venustasの理・立場が保たれるように造られるべきである』（二、三、二）。言うまでもなく、強さの理は構造学に属し、用の理はエンジニアの学に属し、美の理は造形理論に属する」（森田慶一『建築論』東海大学出版会、一九七八年、一七三ページ）

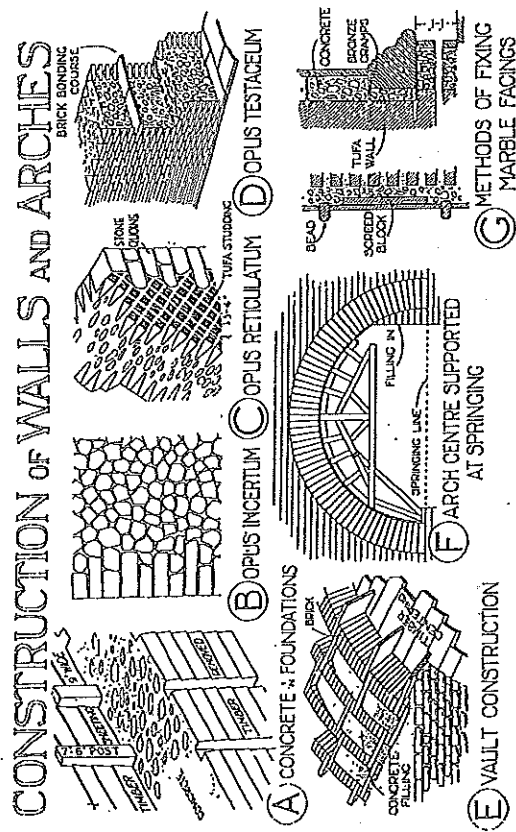
構造学に属する「強さ」は、どうしても耐久性よりは強度に偏りがちな印象を与える。この点をたしかめるために、梅村魁の説くところを聞こう。梅村は耐震構造学の大家であり、歴史的な興味も強くもつていた学者である。

「最初に建築構造とは何かを考えてみだい。人間の創造物である建築は、この社会に人間が生

しおとい



すべての道はローマに通ず(オステリア遺跡)



古代ローマの工法(ロ.フレッチャーによる)

活を始めたときからの作品であり、それが人間に及ぼす影響も計り知れないものがある。その中で建築構造と呼ばれる部分は安全性に関係した分野と考えてよからう。(中略) 現在新しく建てられる建物は、安全性を確かめるために構造計算を行なうのが普通である」(梅村魁「建築構造の歴史」、『新建築学大系25 構造計画』彰国社、一九八一年、四ページ)

ここに明瞭に現れているのは、建築物の安全性を保証するものとしての構造計算である。構造計算は何をする作業かといえは、それは建築物の構造強度を検証する作業なのである。建築物の持続的耐久力を計る作業ではない。

以上の資料に従って三段論法を組み立てれば、森田慶一はウイトルウィウスの理論における firmitas の概念を「強さ」と訳すことにより、それが構造的強度を強く暗示することを認めていたということになる。われわれはしかしながら、そうしたウイトルウィウス解釈がすべてではないことを見つけた。firmitas の概念を「耐久力」、すなわち「長もちすること」と解釈する例も多かった。

ここで現代日本の著述家のウイトルウィウス解釈の例をひとつ加えてみたい。それは塩野七生『すべての道はローマに通ず』(新潮社、二〇〇一年)における解釈である。この著作は古代ローマの遺跡を、インフラストラクチャの歴史として扱っている。ローマの遺跡は驚くほど広範にヨーロッパ各地に残されている。私自身、ブダペストで、イスタンブールで、スコットランド近くで、そうした遺跡に出会ったとき、古代ローマ帝国の範囲の大きさを、目に見え

るかたちで築き付けられる気持ちに驚かれた。

塩野の著作はそうしたローマ帝国の道路、上下水道など、一般にインフラストラクチャーと呼ばれるものの体系を追いかける。ふつう社会基盤構造、社会資本などと呼ばれるこれらの基盤施設は、現代社会にあつても重要な資産であり、公共事業として建設されている。しかしながら現在わが国で、そのあり方が厳しく問われているのは、連日の新聞紙上に現れる特殊法人の整理統合問題に見られるとおりである。

古代ローマ帝国においてこの問題がどのように解決されていたのか、疑問は歴史的な好奇心というよりも現代的な切実さを帯びてくる。で、その答えはどのようなか。この著作は歴史を語る書物であるが、「あらゆる歴史は現代史である」というテーゼもあり、われわれの疑問にも示唆を与えてくれるものになっている。

著者は冒頭でインフラストラクチャーというものの本質を、「人間が人間らしい生活をおくるためには必要な大事業」ととらえる。これは単にこの言葉を社会資本と訳すよりも全体的であり、なおかつその社会資本が何のためのものなのかという価値観をも包含した定義になっている。したがって本書は、土木技術史の概説といった枠をはるかに超えた歴史叙述をめざしていることが知られる。この書物が概観するインフラストラクチャーは、ハードな社会資本のみではなく、教育や医療といったソフトなものも含む。そこでは国家が負担すべき部分と民間に委ねられるべき部分とが、はっきり区別されていた。インフラストラクチャーは、単なる上等

技術の分野にとどまるものではないのだ。

だが、一方で古代ローマが最高の技術水準を誇っていたことも事実である。ローマ時代の幹線道路の舗装技術は、一九世紀になってマカダム舗装という現在のアスファルト舗装の原型ができるまで、史上最高の水準にありつづけたし、建築物の最大床面積をこつてみても、ローマに立つマクセンティウスのバシリカを上回る大規模建物が現れるのは、一九世紀に鉄骨構造が生まれてからである。また、人間が暮らす住居の高さも、ローマ時代のインストラという集合住宅を凌駕するようになるのはエシペーターが実用化されてからのことである。要するに産業革命による機械化・工業化が進むまでは、人類は古代ローマの技術水準を超えることはできなかったのだ。

しかし技術には、それを支える思想がなかったのだろうか。ローマ人たちは何をもちて「人間が人間らしい生活をおくる」とことと考えていたのか。その思想を如実に示すものこそ「道路」であつたと、著者は言う。中国人が万里の長城を築いたのに対して、ローマ人は道路網をつくつたのだと。つまり外乱要素を排除する施設ではなく、それらを同化するネットワークである。帝国を閉じるのではなく、開き、つなげることによって文明を確保しようとしたのだ。「公」は「私」の及ばないこうした部分を受け持つ。そこに彼らの社会資本の概念が存在した。

ローマ時代の道路も上下水道も、だから受益者負担とか事業的採算性といった概念ではつくられなかった。「必要な大事業」として、最高の技術水準をもつて建設されたのである。道路

は軍用道路の性格をもつにもかかわらず、一般の人々の用に供する歩道も備えられており、上水道は高架橋、調整池をもつシステムでありしかも無料で市民に水を提供していた。結果的にそれらの遺産は、現代に至るまでその余慶を及ぼしている。

こうした構造物のもつべき理想こそ、当時の建築家ウィトルウィウスが三つの要素によって示したものであったと、植野は言う。このうちの「強さ(firmitas)」の概念を、著者は「耐久性」と訳している(六六ページ)。これは日本の建築界における伝統的解釈に縛られない解釈である。日本で一般に構造的強度と考えられてきた「強さ」を「長寿命」ととらえたのである。これこそローマ人の考えた堅固さだったのかもしれない。強度中心の技術思想を、持続可能性という観点から問い直す視点がここから開ける。こうした示唆を与えるのが歴史解釈というものかもしれない。

ウィトルウィウスがfirmitasという言葉によって、「建築は強くあれ」と言ったのではなく、建築は長寿命を保つ耐久力をもてと言ったのだと解釈すれば、それは建築はしるどく長生きしろと言ったとも考えられるのであり、ウィトルウィウスは「建築はしるどくあれ」と言ったこと主張することまでできるかもしれない。

すずき・ひろゆき／東京大学教授・建築史家

「建築学」の教科書(彰国社)

安藤忠雄・石山修武・木下直之・佐々木睦朗・

水津牧子・鈴木博之・妹島和世・田辺新一・

内藤廣・西澤英和・藤森照信・松村秀一・松山巖・

山岸常人 著

90・110ページより抜粋